

2023年6月19日

日光街道つまみ歩き総括

山口光恒・幸子

2022年6月に1年半かけて東京の日本橋から京都の三条大橋まで旧東海道五十三次510kmを夫婦で完全踏破した¹。この勢いを持続すべく今度はより短い日光街道の（全部ではなく特に興味深い場所のみの）つまみ歩き²に挑戦し、2022年10月から本年6月の間に5回に分けて成功裏に終了した。以下この簡単な総括である。個々の回の歩行記録はこの後の記録を参照願う。歩数及び歩行距離は合計17万歩及び70km程度（但しこれは自宅出発から帰宅までのほか、古河の町を2度に亘って歩き回った分を含む）、このうち実際に日光街道を歩いた距離は全140kmのうち50km。ほぼ全体の1/3強の区間を歩いたことになる。

日光街道は旧東海道と異なり箱根越えや鈴鹿越えと言った難所がなく歩きやすかったが、宇都宮の先で幸子が転倒、左手首を複雑骨折し急遽予定を中止して帰京の上入院手術というハプニングが発生したため、ほぼ4ヶ月間のブランクを余儀なくされた。我々が歩いたのは日光街道二十一次のうち下記の区間である。宇都宮以降は全ての宿場を歩いたことになる（○の中の数字は日本橋から数えた宿場の番号）。

第1回	2022年10月4日	日本橋	—①千住宿
第2回	2022年10月28日、30日	⑦栗橋宿	—⑨古河宿
第3回	2022年11月27日	⑰宇都宮宿	—野沢 ³
第4回	2023年3月29日—30日	野沢	—⑳今市宿
第5回	2023年6月17日	㉑今市宿	—日光

上記の通り第4回の野沢—今市以外は全て日帰りだった。2泊3日が5回、1泊2日が4回もあった旧東海道とは様変わりである。

つまみ歩きのハイライトは第1回の日本橋—千住宿、第2回の古河宿、それに第4回から5回にかけて長距離に亘る日光の杉並木である。第1回の日本橋—千住区間は江戸情緒満載で、更に杉田玄白らによる解体新書翻訳の基となり日本医学界の聖地でもある千住の回向院や、芭蕉の「奥の細道」の旅の出発地の千住大橋を含んでおりわくわくしながら歩いたと言っても良いほどである。

¹ この記録をまとめて2022年11月に「後期高齢者夫婦の旧東海道ブラ歩き（33日間の旅）」として自費出版した。

² つまみ歩きの対象区間の選定は畏友の街道歩きの達人吉田清直さんの旅の記録を参考にした。

³ 野沢は宿場ではなく、幸子の転倒骨折による歩行中断場所

第 2 回の古河については江戸時代の文化的な水準の高さと、その気品のある落ち着いた街並みを町ぐるみで維持している古河の人々の誇りが感じられ、1 回では飽き足らず日を改めて古河だけを目的にここを再訪したほどである。中でも顕微鏡を用いた雪の結晶の研究の成果を「雪華図説」として刊行した藩主の土井利位、渡辺崋山その他同時代の学者と交わり、蘭学研究でその名を全国に知られ、ペリー艦隊の 2 度目の来訪で世の中が騒然としていた 1854（嘉永 7 年）にアメリカから帰国していた中浜万次郎に面談し、海外最新知識を得るなどしていた家老の鷹見泉石は古河の人たちの誇りである。立派な歴史博物館も整備されている。渡辺崋山筆の鷹見泉石の肖像画は国宝だ（東京国立博物館所蔵）。古河は日本中にもっと知られても良いと思う。

第 3 のハイライトの日光杉並木は江戸時代初期以来のもので、今市宿の一つ手前の大沢宿から始まり日光まで続いている⁴。以前はこの道の一部を自動車も利用していたが、排ガス等により 1961 年には 16500 本あったものが 12200 本に減少した結果、現在は歩行専用道路となっている。そのお陰で杉並木の区間は正に江戸時代とほぼ同様の雰囲気の中で歩行を続けることが出来た。日光の杉並木は日光街道全体のハイライトと言っても良いと思う。

現在我々は 83 歳と 80 歳で、今年中に光恒は 84 歳となる。旧東海道に挑んだ 3 年前と比べると矢張り体力は落ちている。それでもつまみ歩きとは言え日光街道歩きも目標を達成した。良い気分である。これからはこれほどは頑張らずに中山道の特に興味のある場所、例えば島崎藤村ゆかりの馬籠・妻籠辺りをゆっくりと散策したいと考えている。

以上

⁴ 日光の杉並木は日光街道以外にも含めて 36km と世界最長でギネスブックにも登録済みである。